

活動報告書（事例 1）

報告者氏名：松田実 所属：京都市立西総合支援学校(1) 記録日：平成 26 年 2 月 27 日

【対象生徒の情報】

○学年

- ・ 高等部 2 年 女子

○障害名

- ・ 軽度知的障害 自閉症スペクトラム

○障害の困難の内容

- ・ 販売学習時に、商品を複数購入されると、計算しなければと焦ってしまい、いつもなら簡単にできるような暗算もできなくなってしまうことがある。
- ・ また、自分が予測した以外のお金を出されたときに、頭が真っ白になり少しパニックになる。
- ・ 学校の先生や顔見知りの人とのフリートークは得意だが、販売学習の場面等で、知らない相手（購入客等）に製作工程等について、順を追って説明するのが苦手である。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・ 授業では、様々な活動を通して、だれとでも適切でスムーズなコミュニケーションをとれるようになることを目的としている。
- ・ その一環として、年数回、他の作業学習班が製作した製品を校外で販売する機会を設けている。レジスターを導入しスムーズなレジ作業ができれば、計算で焦ることがなくなり、落ち着いて相手とコミュニケーションをとることができると考えられる。
- ・ また、よくお客から「この製品はどのように作られるの？」という質問を受ける。製品は自分が作ったものでないこともあり、製作工程等を説明することができずに、教員に頼っていた。しかし、自分の言葉で説明することができれば、もっとコミュニケーションがとれると考えられる。
- ・ iPad のアプリ等を使用することでこれらのことを補うことができれば、もっと落ち着いてコミュニケーションをとることができ、またそのことが自信となり、他の生活場面や卒業後にも活かすことができると考えられる。
- ・ 実習等で、指導者が同行していなくても、作業報告や出発する旨を iPad を使用して伝えることで、指導者と離れた場所においても、一人で安心して活動したり、離れた相手（指導者や他の生徒）にもコミュニケーションが取れたりすると考えられる。

○実施期間

- ・ 平成 25 年 5 月～平成 26 年 3 月

○実施者

- ・ 前川 智子

○実施者と対象児の関係

- ・ ワークスタディ（作業学習）授業指導教員

【活動内容と対象生徒の変化】

1. 対象生徒の事前の状況

- ・授業では、年に数回、他の作業学習班で制作した製品を校外で販売している。
- ・昨年度の販売時に、170 円の商品に対し 200 円を客が出すことは本人の中では予測ができていたので、すぐに 30 円と計算できるが、220 円を出されたときに頭が真っ白になり少しパニックになってしまった。
- ・また、よく客から「この製品はどのように作られるの？」と質問される。しかしその製品は他の作業学習で作られたものであり、本生徒は制作していないこともあり、製作工程等を説明することができず、代わりに指導者が説明していた。



校外での販売学習

2. 活動の具体的内容

①校外販売実習時のお金の計算で、焦りによるパニックをなくすために

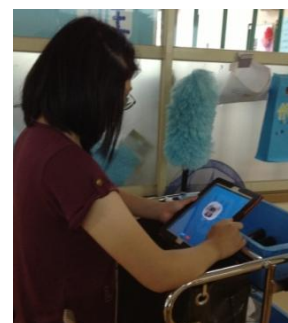
- ・iPad を使ってバーコードを読み取ることで自動入力できる「RegisterPro」というアプリを使用した。
- ・バーコードに入力する販売製品情報は、事前に iPad で生徒自身が入力した。
- ・販売製品情報を入力するために、各作業班にどんな製品があるのかを自分で調べる活動を行った。
- ・それらの学習をもとに、「RegisterPro」を使用して校外販売学習を行なった。



バーコードへの情報入力

②製品の説明を、順を追って端的にできるようにするために

- ・販売製品を客に分かりやすく説明するために、生徒自らが各作業班の取材を行った。
- ・取材では、iPad で写真や動画を撮ることで、何度も聞きなおすことや、本人の「聞き漏らしたらどうしよう」という焦りがなくなり、心に余裕をもって取材を行なった。これは聞きながら書くのが苦手な本生徒にとっては、取材の時に限らずさまざまな場面でも有効な手段であると考えた。
- ・取材で撮った写真と、その工程が分かるキーワードを「keynote」で作成し、客に見せながら説明することにした。



取材情報をまとめる

③指導者がいない場でも主体的に活動するために

- ・離れている人に何かを伝えるツールとして、「skype」を使用した。
- ・相手との通信は、校外で使用する前に、まず校内で使用する練習をした。
- ・校内で自分の担当する活動が終了したら「Skype」を使用して指導者に報告するという取り組みを積み重ねていった。
- ・次に、地域の児童館のメンテナンス作業に生徒だけで行くことにした。指導者と一緒には2度児童館に行ったことがあるが、生徒だけで行くのは初めての経験だった。
- ・また、終了時間が分かりやすいよう「グッドタイマー」を使用した。

3. 対象生徒の事後の変化

①校外販売実習時のお金の計算の場面で

- ・お客が複数の商品を購入する際、本人が「計算しなければいけない」という緊張と焦りが、バーコードを読み取ることで自動入力できるアプリを使うことで、その気持ちを払拭することができ、落ち着いて対応することができた。



焦ることなくお客に应对

②製品の説明等、お客とのコミュニケーションの場面で

- ・「keynote」を見せながら説明することで、落ち着いて順を追って説明できるようになった。
- ・相手にも視覚的に分かりやすく理解してもらえるようになった。
- ・また、キーワードを見直すことで、製作工程を忘れていてもすぐに思い出すことができた。
- ・また、相手の顔を見て話せるようになった。
- ・実際の販売時にお客に聞かれた際にも、スムーズに説明をすることができた。



相手を見て説明

③指導者がいない時の活動場面で

- ・校外(地域の児童館)でのメンテナンス作業では、指導者が同行しなくても、「skype」を使用して、到着や作業完了等の報告をすることができた。
- ・作業内容が分からないときにも、「skype」を使用して学校にいる指導者に連絡を取り、指示を仰ぐことができた。
- ・このことで、指導者が常についていなくても自信を持って活動できるようになった。
- ・また、「グッドタイマー」に終了時間を入力しておくことで、終了時間までは時間を気にすることなく清掃業務に専念できた。



校外で作業中の生徒から質問

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- ・今までは、タブレット端末をはじめPCなどを操作することに対し苦手意識を持っていたが、この取り組みを通し、iPadやPCを使用する機会がふえ、また、使用すると困りが解決されていくのが本人にも感じられたことで、苦手意識がなくなっていった。
- ・Googleの手書き検索を利用して知らない漢字を自分自身で調べる方法が分かり、積極的に作業に取り組めるようになった。
- ・レジはiPadを上下させてバーコードを読み込んでいると時間がかかり、お客を待たせることになり、それが原因で焦ってしまうことがあった。そのため、iPadを動かすのではなく、iPadを置き、その下に商品を入れてバーコードを赤いマークに合わせると読み取れるようにした。そうすることで、レジ作業がスムーズにでき、より落ち着いて活動ができるようになった。



バーコード読取台

○エビデンス

①レジ機能を使った対応について

☆ 今までは・・・

複数の商品があると焦っていた。

→iPad があると 【本人の感想】

- ・今までは『間違えないように』ということに集中していたが、それがなくてよかった
- ・複数の商品でも計算で焦ることなく、落ち着いて対応できた。
- ・気持ちに余裕ができた。
- ・また、レジ中に他の人が説明を求めてきたときには、「少しお待ちください」と言うことができた。
- ・「RegisterPro」を使用することで、1日40人程度の来客にも落ち着いて対応できた。

②端的な説明について

☆ 今までは・・・

自分で作ったものではないので説明ができなかった

→紙と鉛筆での取材後、iPad を使わないで客に説明していた頃 【本人の感想】

ずっと紙（下）を向いたままで、客の動きや反応を見ていなかった。

頭が真っ白で、うまく説明できたかどうかまでは考えられなかった。

紙を見て文章をつなげて読んだだけだった

→iPad を使った取材後、keynote を使った説明の時 【本人の感想】

相手の顔や様子(表情)を見て話すことができた。

取材から時間が空いてしまって忘れていても、画像やキーワードがあることで思い出すことができて、ちゃんと説明することができた。

③「skype」をつかったやりとり

→校内での使用時 【本人の感想】

先生はどこにいるかわからないので（他の生徒の指導にも行くので）報告に行くには校内中探さないといけないけど、これだとすぐに報告できる。

→校外での使用時 【本人の感想】

緊張した（自分たちだけで作業に行くこと）が、何かあったら聞けるので良かった

○その他エピソード

- ・取材の際に動画や画像を撮る時は、著作権や肖像権、プライバシーなどを考え、事前に了解を得る必要があるなど、モラルに関する学習もできた。
- ・本人は携帯電話を所持しているので、画像や動画を残しておくことで相手に説明しやすくなるということが分かれば、卒業後も携帯電話をツールとして困りを解消するために活かすことができると考える。
- ・校外メンテナンスは、地域の児童館以外の場所に範囲を広げていき、さらに自信がつくことで、自主性を伸ばすことができると考える。

活動報告書 (事例 2)

報告者氏名： 松田 実 所属：京都市立西総合支援学校(2) 記録日：平成 26 年 2 月 27 日

【対象児の情報】

○学年

- ・小学部 1 年 男子

○病名

- ・若年性皮膚筋炎，肢体不自由

○障害と困難の内容

- ・病気の症状を抑えるための服薬で，感染症にかかりやすいという副作用がある。
- ・インフルエンザ等が流行する時期には，学校に登校できない日があることが推測されている。
- ・知的には遅れが無いため，準ずる課程で学習している。校内では，話ができる友だちが少なく，同年齢世代のコミュニケーション環境の面で十分とはいえない状況がある。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・病気のために，体調不良や感染症が流行する時期には登校できなくなると考えられるので，学校で学習できない日には，iPad を活用して家庭に居ながら，学校の教員とやり取りして学習することによって，登校できないときの学習保障を進める。

○ねらいの変更(欠席が少なかったのでねらいを変更)

- ・居住地校に交流学習をしに行ったり，放課後に近所の友だちと遊んだりする中で友だちと仲良くしたい，友だちの輪の中に入って一緒に遊びたい，という思いが出てきた。
- ・しかし，身近な大人と話すときに「忘れた」と言って，会話が続かないことがあったので，コミュニケーション力を上げて楽しく会話をする，ということを新たなねらいにした。
- ・そうすることで，友だちと関わる時にも上手にコミュニケーションでき，より仲良く楽しく遊べると考える。また，交流学習でよりスムーズに友だちの輪に入れるように取り組んでいく。

○実施期間

- ・平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月

○実施者

- ・番あゆみ

○実施者と対象児の関係

- ・担任

【活動内容と対象児の変化】

1. 対象児の事前の状況

- ・思い出すのが苦手で，指導者と話をしても「忘れた」と言う。
- ・そのことによって，話が発展せずに途中で終わってしまう。
- ・「すぐ忘れてしまうんだ」と言って，思い出して話すことを苦手と感じている姿があり，苦手なこ

とをするのが億劫で面倒に思うことがあるような様子が見られる。

- ・居住地校交流を行っているが、合唱発表に向けた練習では、練習に全回出席することができず、支援学校で一人で練習せざるを得ない。一人では練習する意欲が出ない。

2. 活動の具体的内容

①画像をもとにして会話

- ・休み時間に「iPad のカメラ機能」で画像を撮る。休み時間に何をして遊んだのか誰と遊んだのか等を、指導者と話をする。指導者に質問されたときに、思い出せなかったら画像を見ながら話をする。相手に画像を見せて楽しかったことを話した。

②「skype」の使ったのやりとり

- ・「skype」を利用して、離れたところにいる指導者や友だちとリアルタイムでやりとりをする。学校内（教室⇔運動場）→校外学習（学校⇔植物園）→校外（学校⇔病院）、（国際会館：和太鼓発表会場⇔指導者自宅）と、通信距離を広げた。

③日記のやり取り

- ・「ぼくらの交換日記」を利用して、楽しかったことや嬉しかったことを文章にして表し、離れたところにいる指導者と日記のやりとりをした。長期休暇（夏休み冬休み）や土日に取り組んだ。

④友人の動画を見ながら活動

- ・居住地校交流に行ったときに、本人とクラスの友だちが映るように合唱の練習場面を「iPad のカメラ機能（動画）」で撮り、動画を見聞きしながら合唱の練習した。

3. 対象児の事後の変化

①画像をもとにして会話

- ・画像を見ながら説明することで、思い出して指導者に説明することができ、話題が増え、話がより活発になった。

②「skype」の使ったのやりとり

- ・離れたところにいる指導者に対し、「skype」を利用して、どこにいるか、どんなことをしているか等を意欲的に話していた。

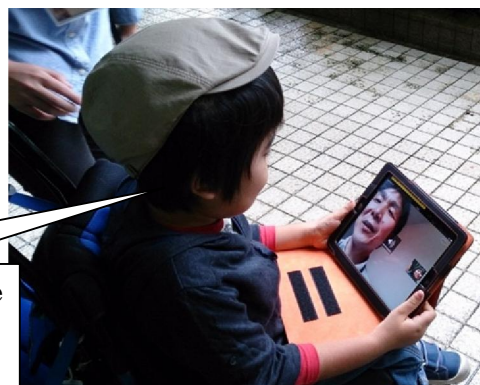
③日記のやり取り

- ・文字数が増え、より具体的に伝えられるようになった。
(1行→3行)

④友人の動画を見ながら活動

- ・一人で練習をするときより意欲的に歌うことができた。

校外学習で行った植物園から学校に skype で通信をしました。どこにいるのか、どのような植物があるのかを話しました。



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

①画像をもとにして会話

- ・「iPad のカメラ機能」を利用して、休み時間に読んだ本や一緒に遊んだ指導者などの画像を撮ってくることで、その画像をもとにして会話ができた。

- 今までの多くの時間をを大人と過ごしてきたこともあり、「忘れた」と言っても馬鹿にされないし、「そんなことも知らないのか」などと言われて悔しい思いをしたことは少なかったと考えられる。「忘れた」と言ったら済まされるし、思い出すのが面倒だ、別に今その話はしたくない、という思いから「忘れた」と言ってその話題から逃れようとしている感じがあった。しかし、自分で撮ってきた写真を目の前にして話すと、意欲的に話そうとしていた。
- 意識を持って撮った写真であるからこそ、その写真自体に興味関心があるため話す意欲が出てきたのだと考えられる。
- 質問に対して応えるだけでなく、写真を見ながら話すことで、詳しく話せることができるようになった。

②「skype」の使ったのやりとり

- 相手の顔が見えていることや、互いの状況が画面を通してよくわかることにより、積極的に自分から話せることが増えた。

③日記のやり取り

- 「ぼくらの交換日記」を利用するとともに、紙に書く日記に取り組んでいくことで、日記に書く文章量が多くなっていった。
- 内容も活動したことだけだったが、その時の気持ちを添えたり誰と活動したのかを書いたりするなど詳しく書くようになった。



朝顔の花がたくさん咲いて嬉しかったことを、日記に書きました。写真も添付し、画像でも様子を伝えました。

④友人の動画を見ながら活動

- 「iPadのカメラ機能」を利用して撮った皆と歌っている様子の動画を見聞きしながら行うことで、交流児童と一緒に歌っている気持ちが持て、それまでより集中して練習できた。より大きな声でよりきれいな声で歌って練習できた。
- 交流学习前日にも動画を見ながら練習に取り組むことで、交流学习に向かう心づもり・気持ちの準備ができ、スムーズに交流学习に参加できた様子だった。
- 本番では、自信を持って臨むことができ、手話の振り付けや歌うことが皆と一緒に堂々とできた。

○エビデンス

①画像をもとにして会話

- 「iPadのカメラ機能」で撮った画像を相手に見せながら話すことで、言葉だけよりも話題の共有がしやすくなった。また、画像が話題を補助する機能を持ち、聞き手の反応も良くなった。
- うまく表現ができないときには、画像を示して自分なりの表現で話しつつも「○○ということ？」等と指導者に助け舟をもらいながら説明ができた。
- 「忘れた」と言って、会話が続かないことが無くなった。
- 「何したの？」→「○○した」のように問いに答えるだけだったが、「ポケモンの本読んだよ」「ポケモンの中で○○が好き」「先生は何が好き？」というように会話が発展するようになった。

- ・写真に撮っていないことで、思い出せないことがあっても「今度また見てくる」と言って次のときに話すようになった。

②「skype」の使ったのやりとり

- ・「skype」では、当初は、「おーい」「みんな一聞こえる？」という通じているかどうかの確認しかできなかった。しかし、指導者と顔を見ながらやり取りして話す内容を広げていくことで、自分から「今は〇〇にいて～しています」とその場の状況を話せるようになった。

③日記のやり取り

- ・「ぼくらの交換日記」では、始めは1行だった文章が3行に増えた。書く文章量が増え、内容が豊かになった。
- ・当初は、活動した事実だけを書いていたが、気持ち・感想を添えるようになった。また、誰としたのか、も添えるようになった。
- ・日記アプリを使うことで即時に指導者から返答があり、内容について質問されたときにさらに詳しく説明できた。紙の日記だったらフィードバックが次の日以降になるので、内容について質問されても「忘れた」と言ってしまう状況になっていた。
- ・前期はひらがなが定着しておらず、文字を書いて表現することが難しく鉛筆を持って日記に向かうことが億劫だったが、iPadのキーボードだと50音に並んでいるので文字入力しやすかった。気軽に抵抗なく取り組み、自然に文章力が向上していった。

④友人の動画を見ながら活動

- ・当初の練習では、一曲のなかで10回以上間違えており、指導者の手本を見ながら取り組んでいたが、動画を見ることで意欲的に練習を積み重ねられ間違えることは減っていき、本番では手話の振り付けや歌を間違わずに発表できた。
- ・もともと皆の前に出ることが苦手で、下を向いてしまうことが多かったが、動画をよく見ていたことで友人たちとの親近感や一体感が強くなり、本番では、皆と一緒に下を向かずに背筋を伸ばして発表できた。

○その他エピソード（画像などを含めて）

- ・「skype」等のテレビ電話機能を使ってリアルタイムに学校間をつなぎ、より一体感を持って交流学習を行うことを目指したが、居住地校との連絡・調整が十分にできず、実行できなかった。今後は居住地校に行けないときにテレビ電話機能を利用し、今まで以上の頻度で交流学習を進めていきたいと考える。

○校内・地域への啓発活動の紹介

【校内への啓発】

①iPad活用のグループ研究

- ・年に5回の校内研究会を実施
- ・1月には他の研究グループと合わせての全校報告会にて、iPad活用の取組を紹介

②職員会議…4月と12月に「魔法のランププロジェクト」の取組を紹介

【地域への啓発】

①市内情報交換会（7月，11月，2月 プロジェクト参加京都市立総合支援学校 5校連携の取組）

- ・実践担当教員，関心を持つ京都市立学校教員，該当校管理職等が集まり，参加5校の実践事例やiPad活用の取組についての情報交換及び協議を行った。
- ・京都市教育委員会の指導主事2名にも参加していただき，助言をいただいた。

②本校学校運営協議会にて，iPad活用の取組について報告

- ・地域の自治会からiPadを寄贈いただき，本校でiPadを活用していることを地域に発信